

農業近代化の経験と語り

——根釧パイロットファームの事例——

東北大学 徳川直人

【1. 目的】

この報告は、農業近代化の経験と意味をさぐる研究の中間報告であり、根釧パイロットファーム事業による入植者の場合をとりあげ、インタビューおよび資料から、その経験と語りの類型を取り出すことをねらいとしている。北海道別海町の床丹地区で展開された根釧パイロットファーム事業（1955-1965）は、日本初の機械開墾事業であり、先行投資型農業の先駆けであり、草地酪農の創設事業でもあって、戦後開拓事業の跳躍点であると同時に基本法農政の先取りとしても位置づけられる。かつては小学校教科書や教育用地図帳にも掲載されていたが、今日、これについて部内資料のほかに参照できる刊行物は稀少であって、社会的忘却の危機にある。現地、別海町を訪れても、人工物としてのその痕跡はもはやほとんど見ることができない。その事業としての成否をここで直ちに再評価しようというのではない。入植者によって「経験されたもの」として見たときパイロットファームとは何だったのか。それが今に残した営農志向や生活態度はどんなものか。それについて考察するのが目的である。

【2. 方法】

本研究に着手した2012年前後、現地では入植当事者たちによって、開拓の歴史を語り継ぐ活動および資料館づくりが進行していた。報告者は、その活動にも示唆を受けながら、存続・存命の入植名義者およびその配偶者に対するインタビューと、当事者が書いたものの収集にあたった。中心的なメンバー10名余からインタビューへの参加を得ることができた。その折、資料から作成した地図や年表などを参照しながら回想してもらう方法、および、一定程度まとまりが見えたところで報告者が地方誌に掲載した読み物（2015～16年）を当事者たちに還元しながら聞き取る方法も加味した。

【3. 結果】

同一事象の中にあつた人々の間でも、その経験および語りには葛藤や多様性がある。本事例でも、最初に語られがちなモデルストーリーは、華々しく喧伝された事業の裏で入植者たちが嘗めなければならなかった辛酸の語り、あるいは、一見したところそれとは逆に、困苦にめげずに事業を成し遂げ一大酪農郷を建設した自負と誇りの語りであった。なかでも、機械開墾の壮挙、初期のブルセラ病、負債整理のため経営不振者との取引を自ら断たざるをえなかった農協総会、その結果としての規模拡大と農地の分散、それを処理した交換分合は、何度も反復して語られる経験であると同時に、今なお、表明されれば傷や葛藤を呼び起こす語りづらさを有している。さらに聞き取りを続けると、これらの記憶が、今日の農業情勢との対比によって「教訓」としての意味を付与されてゆく場合がある。たとえば、過剰投資の経験をふまえた風土論や適正規模の酪農論、生産一辺倒に対する生活の観点からの批判に導かれた生活文化論、開拓初期に経験した森林や川の記憶に媒介されたエコロジカルな観点からの文明批評のように、ありえたかもしれないオルタナティブについての語りが見られた。

【4. 結論】

艱難辛苦の経験は概して語りづらさを抱えているが、他方、その経験の語りは単に記憶の想起であるばかりではなく、今日の社会状況との対峙関係によって意味づけられる。語りが「伝承」でありうるのは、単に記録として収集され所蔵されることを通してではなく、語り・聞くことによる意味的触発を通してではないだろうか。